

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580002

研究課題名(和文)手話言語における哲学表現の可能性について

研究課題名(英文)Possibility of philosophical expressions in the Japanese sign language

研究代表者

高山 守(TAKAYAMA, MAMORU)

東京大学・人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号：20121460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、近年、固有の一言語としての地位を獲得しつつある手話言語の概念的および論理的特性を、哲学的な観点から明らかにすることであり、また、それによって、これまでの哲学的論議に、新たな方向性を見いだすことである。すなわち、手話言語は、手、表情、その他の身体を使って表現される特有の言語であり、この特有性のゆえに、概念的および論理的な諸表現において、一般の音声言語とは根本的に異なった、特有の形態をとりうる。本研究は、その特有の形態を、とりわけ、哲学的な観点から取り出し、考察を加えるとともに、その特有性に基づいて開かれうる、新たな哲学的な論議の展開を試みる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is, in the first place, to clarify conceptual and logical characteristics of the Japanese sign language that people consider in late years to be an equally peculiar language to Japanese, English, German etc., from a philosophical point of view, and in the second place, to find new courses of philosophical discussions based on the characteristics. A sign language is generally a special language expressed with hands and a face and has special forms of expression fundamentally different from the general spoken language in many conceptual and logical expressions because of this peculiarity. We take up the special forms for our study from a new perspective angle and try to develop new philosophical discussions based on the specialty.

研究分野：人文学

キーワード：手話

## 1. 研究開始当初の背景

手話が近年、日本を含め広く世界で、音声言語とならぶ独自の一言語と認知され、さまざまな学問分野においても使用されはじめている。しかし、哲学という分野においては、それはいまなお、およそ疎遠な言語にとどまっているという現状が、本研究の背景である。

## 2. 研究の目的

こうした現状のもと、手話を使用して、実際にさまざまな哲学的な議論を試み、手話が一般の音声言語に比しておよそ遜色なく、その議論展開をなしうるものであること、さらには、手話言語という特有の身体言語であるからこそ開きうる、新たな哲学的な視野がありうること、このことを明らかにすることが、本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

一つには、ろう者(手話使用者)と聴者が共に哲学的な議論を行なう場を設け、また一つには、ろう者(日本手話ネイティブ)のみで哲学的な議論を行なう場を設けるといふ、この二点の実施により、実際に手話による哲学的な議論を行なうということ、さらには、その議論を精査し、そこに手話特有の議論の展開を見いだすということ、これが、本研究の研究方法である。

## 4. 研究成果

本研究においては、「哲学手話の会」と称するろう者、聴者が合同で、哲学的な議論を行なう会を12回開催した。そのテーマは、「神とは何か」、「自分らしさとはどういうことか」、「科学は万能か」、「幸せとは何か」、「動物に対する人間の特権性」、「心はどこにあるのか」、「悪とは何か」、「生きるとはいかなることか」、「死とは何か」、「カントの〈善意志〉とは何か」、「財産、名声、病や健康等への気遣いは正当か」、「理想的な人間関係とは何か」であり、最後の三回については、それぞれ、カントの『道徳形而上学への基礎づけ』、エピクテトスの『要録』、そして、アラン『幸福論』の一節をテキストに使用した。また、この会とは別に、手話ネイティブのろう者のみによる論議の会として「〈命〉をめぐる手話表現検討会」を開催した。

こうした会を実施することにおいてなされたことは、手話言語によって、実際に哲学的な議論を遂行するということであった。そうしたなかでなされた論議は、しばしば立ち入った哲学的な論議であり、それが、音声言語(日本語)と同様に、手話言語によっても担われ、展開された。たとえば、「神とは何か」。神は、ほぼつねに像(キリスト像、仏像等)として現前するが、しかし、いわば神そ

のものは決して像化できない無形の魂であると考えられる。しかもそれは、それ自体特定の内容を一切もたないからこそ、私たちすべての人間の精神内容を受け入れうる。その意味で、それは、私たちすべてを映し出す鏡であり、内容的に私たち自身であると考えうる。だがそれは、私たち自身でありつつ、それ自体、私たちを絶対的に超越している。こうした、神に関する一つの考え方をめぐって、いったい神とは何なのかという論議が、手話言語においても、具体的説得的に展開された。

「自分らしさ」に関しては、もとより、「自分らしい自分」とは、自分本来の自分である。しかし、この「本来の自分」とは、ポジティブな意味にもネガティブな意味にも了解される。しかもそれがそれとして意識されるのは、自分の状態が芳しくない折である。そうした折、私たちは、一方で自らを「自分らしくない」と自己把握する。しかし、他方で、そうした芳しくない自分をこそ「自分らしい」とネガティブな自己肯定をする。ここには、両立しえない自己了解が存するのだが、しかし、実は、こうした「本来の自分」をめぐる二面性にこそ、「本来の自分」なるものが存しているのではないか。このような哲学的な観点からの人間性の根本的なあり方に関して、手話言語においても十分な言表がなされた。そのほかの「哲学手話の会」においても、同様に哲学的な諸問題をめぐり、手話言語も活発な論戦を遂行した。

また、「〈命〉をめぐる手話表現検討会」においては、生き生きとした「命」の経験的な把握が存分に語られた。自らが自分自身を全面的に自然や社会に開くことにおいて、自然や社会と一体である自分自身、および自分自身と一体である自然や社会が、まさに「命」そのものとして把握されること、さらに、そうした一切を超越したまさに「無」の境地と云うるものにおいてこそ、やはり総じて一体である自然・世界・自分という全体の「命」が、ありありと感得できること - - こうしたことが、手話ネイティブのろう者の間で生き生きと語り出された。

こうした会を実施することにより、まずもって明白となったことは、今もってなお一般には、抽象表現には不向きな、単なる日常生活をやりくりするだけの生活言語と見られがちな手話という言語は、決してそうした日常的な実用言語にとどまるものではなく、きわめて抽象性の高い哲学的な論議をも、一般の音声言語同様に、現に遂行しうるものなのだ、ということである。

さらに、この点を踏まえて、本研究が試みたことは、このような手話言語による哲学的な論議のなかから、とりわけその論議特有の展開構造を見だし、そこに特定されたその特有の構造に基づいて、これまでの哲学上の論議には見られない、新たな認識論および存在論の可能性を探るといふことである。その点で、特に言及されるべきは、「音韻、単語

および文表現の重層性・同時性」という、手話言語の際立った特有性である。すなわち、通常の音声言語においては、音韻、単語、文等が、すべて併存的に、つまり経時的に表現され、したがって、それらが、重層的・同時に語り出されることはない。それに対して、身体動作によって表現される手話言語においては、それらが、重層的・同時に表現されうる。たとえば、〈か〉・〈み〉(神)の両音韻がそうであり、〈とても〉〈自分らしい〉の両単語、そして、〈歯を食いしばって〉〈我慢する〉という両文がそうである。論議においては、こうした重層的な表現が頻出するわけだが、哲学的な論議全般に関して重要な意味をもちうるのは、いわゆる「直近の因果(immediate cause and effect)」に関する表現である。すでに上記両文の例がこれに当てはまるのだが、さらに簡単な例によるならば、「このドアを押す」と「このドアが開く」が、直近の原因および結果である。この両表現は、通常の音声言語においては、経時的、併存的になされるため、そこに表現される事態は、時間的に相前後して起こる相異なる二つの事柄と了解され、そうであることにおいて、前者が原因、後者が結果と見なされる。しかし、手話言語においては、事情がまったく異なるのである。すなわち、通常原因と結果と見なされるこの両表現は、重層的・同時に語られる。いわゆる原因表現がそのまま結果表現であり、その逆でもある。原因と結果とが一個同一の事態であるということもできる。ここに見えてくることは、原因は、結果に対して決して時間的に先行するものではなく、両者は同時的であるという了解形態であり、また、それどころか、原因と結果とは、一個同一の事態なのだから、この了解形態においては、因果関係という関係性自体が存在していないことがありうるということである。

このことは、むしろ、因果関係という了解形態そのものが総じて存在しないことになりうるということではない。「直近の因果」とは別の「遠隔の因果(remote cause and effect)」に関しては、いわゆる因果表現が成立する。「追突事故が起きた。」その原因は「脇見運転だった」という場合、手話言語においても、この二つの事態は、時間的に相前後する二つの異なる事柄の関係、つまり、因果関係として表現されうる。しかし、いま重要なのは、いわゆる「直近の因果」に関して、手話言語においては、その因果関係が解消している可能性があるということである。

こうした手話言語における特有の表現形態によって、新たな哲学的な視野が開かれる。それは、一つには、D.ヒュームやI.カント、さらには黒田亘の因果論に対する直接的な反駁という観点である。前二者の因果論においては、原因と結果とが時間的に相前後する二つの出来事であるということが決定的である。また、黒田の因果論においては、因

果の同時性が認められつつ、行為としての原因と結果としての事象とが、二つの事柄として区別され、前者から後者への一方向性が強調される。しかも、これらの因果論において取り上げられている因果関係は、いずれも、基本的には「直近の因果関係」なのである。そうであるとすれば、こうした因果論は、手話言語においては、根本的に不成立なのである。

また、新たに開かれる、もう一つの視野は、手話言語においては、直近の因果の了解構造が、遠隔の因果の了解構造へと転化し、それによって、存在論的ならびに認識論的な観点から、音声言語とは根本的に異なった論議の展開がなされうるということである。すなわち、音声言語においては、総じて、原因と結果とは、相異なる二つの事柄と見なされ、それらが、時間的に相前後して生じるものと解され、そして、その二つの相異なる事柄が、まさに原因と結果として結びつけられる。これに対して、手話言語においては、まずは、直近の因果において、原因と結果とは、一個同一の事柄として表出されるのであった。そうであることにおいて、実は、遠隔の因果においても、同一の表現形態が取られるのではないかということなのである。むしろ手話言語においても、脇見運転が原因で、追突事故が起こったとの表現はなされうるわけだが、しかし、標準的には、その事態は、そのように表現されるのではなく、脇見運転から追突事故発生までのプロセスが、きわめて具象的に、一連の出来事として表現されると考えられる。ここにおいては、原因から結果へと、非連続的に飛び移ることはない。いわば、脇見運転に始まる一連のプロセス全体が原因であり、その結果、追突事故が起こったというように表現される。そして、ここにおいては、この原因としての一連のプロセス全体とは、まさしく追突事故が起こったという結果そのものであり、ここには一連の、しかも一個の出来事が存するのみなのである。

このように見る限り、手話言語においては、非連続性・飛躍というものの存在が希薄である。このことが、しばしば言われる手話言語のロー・コンテクスト性ということと密接に関わるように思われる。これは、手話言語においては、コンテクスト依存的な行為要求的要素が希薄であるということである。たとえば、「寒い」と発話された場合、音声言語であれば、それは、コンテクストによって、「何が着るものが欲しい」とか「窓を閉めて欲しい」とかという行為要求を含意する。しかし、手話言語の場合、そうした含意は基本的にない。「寒い」という発話には、ほとんどそれ以外の含意はなく、その表現内容がその意味のすべてである。「着るものが欲しい」のだとすれば、また、「窓を閉めて欲しい」のだとすれば、引き続き、そうした発話がなされなければならない。手話言語の非飛躍性である。

こうした手話言語における非飛躍性は、存在論的および認識論的な観点からの新たな表現形態を提示していると思われる。それは、連続変化型表現形態と呼ぶものである。それは、音声言語の非連続結合型表現形態 - - たとえば、連続しない原因と結果を、その中間プロセスなしで結合するという表現形態 - - に対するものだが、それはまた、音声言語のデジタル型に対して、アナログ型と言うこともできよう。このアナログ型表現形態においては、表現がデジタル的に切り刻まれることがなく、その表現形態そのものに、いわば生命の躍動性があるといえる。そこにおいては、現象と本質の区分が消失するとも言える。こうしたアナログ型表現は、「哲学手話の会」や「<命>をめぐる手話表現検討会」においても頻出し、その表現形態は、たしかに、音声言語とは根本的に異なった論議の展開へと開かれうるものでもあった。

以上のことが明らかになることにより、本研究の成果は十分に達せられたと思われるが、さらなる問題は、こうした表現形態によって開かれた新たな視野に基づいて、どのような新たな本格的な哲学的論議が展開されるのかということである。こうしたさらなる哲学的論議については、今後の研究に委ねられることとなる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

高山守、「自由」をめぐる西田とヘーゲル、日本の哲学、査読無、16巻、2015、30-45

〔学会発表〕(計 3 件)

高山守、ヘーゲル哲学における無と自由、2015年6月6日、日本ヘーゲル学会(招待講演)、高野山大学

高山守、Der Verlust der ersten und zweiten Person im Japanischen vor dem Hintergrund von Nishidas Ueberlegungen zur <reinen Erfahrung> (招待講演)、2015年5月15日、Gustav Stresemann Institut, Bonn Bad-Godesberg, Germany.

高山守、「自由」をめぐる西田とヘーゲル、2014年12月24日、土井道子記念京都哲学シンポジウム(招待講演)、京都ガーデンパレス

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕なし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

高山守 (TAKAYAMA MAMORU)

東京大学・大学院人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号：20121460

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし